

藤井裕久民主党最高顧問に聞く1

二〇一二年一〇月四日（木）

衆議院第一議員会館九一九室にて

聞き手

尾崎美千生 元毎日新聞政治部副部長 高連協参与

堀内正範 朝日新聞社社友 「月刊丈風」編集人

新世紀このかた一〇年余、手つかずのままといっている「日本高齢社会」構想を論ずるにあたって、お会いすべき必要のある方々はだれとだれかが話題になった。二〇〇九年七月、ジャーナリスト仲間のこと。

その立場にある方々というのは、政治家、官僚、経済人、学者、マスコミ関係者、そして先駆的な活動者で、政治家としてまずあがったのが藤井裕久さんだった。政治の側での「尋根求底」のためには一九八〇年代まで遡らねばならず、そこまで遠く経緯を求めるとなると、七〇歳より前には求められなかったからである。

二〇〇九年八月三〇日に総選挙があつて、民主党が大勝して政権交代があつたあと、藤井さんは「渦中の人」でありつづけた。マニフェストに「官僚主導から政治（国民）主導へ」「コンクリートから人へ」を掲げて政権に就いた民主党に、「人々高齢者」に関する「ライフ・イノベーション」を期待しつつ、お会いする必要を感じながら三年を待つこととなった。

その間に藤井さんは、五〇歳代の野田佳彦首相がぶれないよう支えつづけて、二〇一二年六月に衆議院、八月に参議院で「消費税増税」法案の採択にこぎつけ、国際的には日本政治への信頼を確保することとなった。財政上のひと仕事は終えたものの、あとの経済成長をどうするかは課題に、高齢者が関わることに明解な回答をしてくれるであろうという期待を持ってお会いした。

一〇月四日（木）の午後、尾崎美千生・元毎日新聞政治部副部長の「驢尾」に付して、衆議院議員会館にお訪ねした。世紀をまたいで政界の経緯を熟知しておられる八〇歳の藤井最高顧問と「産婆術」を心得た熟練政治記者である尾崎氏の示唆に富む時局対話がしばらくつづいた。おふたりは和気あいあいの対話のうちに、政治の現状に鋭くメスをいれて課題を摘出して、その解決法まで示唆してくれたのだった。わたしはそこに織り込むようにして、「日本長寿社会（高齢社会）」のありようについての積年の憂慮を伝え、ご意見を聞いた。

尾崎さんの眼疾による視野の右傾化という洒落な報告からはじまり、「近いうち」解散の時期、広がりを見定めづらいう「維新の会」の力、第三党はどこか、野田総理のぶれない戦略と人を見る目、組閣の顔ぶれと身体検査のこと、田中直紀・真紀子論、臨時国会、赤字国債へと話題は次ぎ次ぎに展開した。ここはその場ではないので政局へのご意見は省略させていただいて。

高齢化・高齢社会について

・「消費税」を高齢者福祉の目的税に

尾崎…わが国の「高齢化」についてのお話を。

藤井…まずは「消費税」の「高齢者3経費」としての福祉目的税ですね。小渕（恵三）内閣のときに福祉目的税にしました。当時の自由党をリードした考えは、この社会を建て直した人はいつたいたいだれなんだ。若い人は恩恵を受けているだけではないか。もつといえは「赤紙」をもらった人が戦後がんばった。この人たちの晩年に報いるために「高齢者3経費」（基礎年金・老人医療・介護）として目的税にして、それ以外に使えないようにした。宮沢（喜一）大蔵大臣は他党の提案だけでもわかってくれて、自民党には完全目的税という発想まではないけれどもといって、予算総則に「高齢者3経費」にしか使えないと書いてくれた。そのあとに子育てを加えて4経費になった。もうひとつ高齢者医療だけでなく一般医療にしたので医療保険にも使えるようになっていく。完全目的税というのは会計的に目的税だから一般会計にいれない。

・今度の「消費税」案は与謝野氏の功績

藤井…今度の「消費税」案は、政権交代の前に自公がつくった。福田・麻生内閣のとき、自民党で与謝野（馨）がリードした案だけれど、全うな人がつくったものだから勉強

しろと言った。民主党になって菅（直人）さんの最大の功績は与謝野を引っ張ってきたこと。与謝野の功績というのはふたつ。会長としてマスコミによく説明して納得させたこと。3・11のあと「こんな時に増税か」という声のなかで静かにやっていた。六月末までの三カ月でできたのは与謝野の功績です。すぐ横にいて彼を助けてましたよ。東大野球部の仲間だから。

・全国民の負担がいい

堀内…野田（佳彦）さんからは見えない、五〇歳代からは見えない高齢者の姿がある。高齢者を騎馬戦や肩車をする姿で負担を説明するが、上に乗っているのはお年寄りじゃない。多くの高齢者はいま「支える側」にいる。三〇〇〇万人のうち八〇%がそう。いろいろ支えている。

藤井…若い人は年金をもらえなくなるといわれてそう思っているようだが、日本国家の破産ですからそれはありえない。対応は三つある。一つは借金。南ヨーロッパだよというわかる。二番目は保険料。会社員、役人、自営業になれば実感する。三つ目は若い人ばかりではなく全国民が薄く負担する。そして君らの年金を安定化する。ディスカッションさせるとまず一〇〇%が消費税。じいさんでもばあさんでも消費することで全国民が負担する。若い人だけが支えるわけではありません。だからわたしはあれ（肩車）をいったことありませんよ。野田さんもやめた。

・「高齢者雇用安定法」が成立

尾崎…三〇〇〇万人にもなった高齢者をもっと使おうという姿勢が野田内閣から出てこない。

藤井…ありますよ。「高齢者雇用安定法」なんかがそう。「高齢者雇用安定法」は、六五歳まで働けるようにした。年金をもらえる年齢とむすびついていますが。いずれは六七、六八歳までになる。日銀ではなくて、資産の一五〇〇兆円を活かすのがいい。おれおれ詐欺で一〇〇〇万もやられる。まっとうな消費に使えばいい。働ける人まで働かせないようになっていることが問題です。

堀内…「高齢社会」の形成の問題を一九九九年の「国際高齢者年」以来みていますが、元気な高齢者がどんどん増えてくるのにやることをつくれなかった。だから知識も技術も資産も滞ってしまっている。これは政治家の構想の欠如ではないですか。政治ですよ。

藤井…政治です。六五歳までを会社と労働組合と雇用者で決めてきたけれどもそうではなく、能力のある人はかならず働いてもらうしくみにする。「高齢者雇用安定法」ができたが、まだ六五歳まで。ぼくら八〇歳でもやりますよ。

・高齢者の政治代表が少ない

尾崎…それで政治家でいうと、小泉（純一郎）さんのときに中曽根（康弘）さんと宮沢さんにやめてもらったりしたのだけれど、二四％の人が六五歳以上になっているのだから、高齢者の代表はもつとあっていい。

藤井…それいうとまたやれといわれるから。

尾崎…やりたくないというのならそうはいえないけれど。政治家もそれなりの人はやってももらったらい。

堀内…藤井さん、岸（恵子）さん、樋口（恵子）さん、堂本（暁子）さん、石原（慎太郎）さん。みんな同い年の八〇歳。

藤井…石原が新党つくるといっているが、むずかしい。八〇歳になるとクリエイトする力はない。知恵はある。学生るとき石原はサッカーで、わたしは野球。わたしとどっちが元気がわからないが、知恵はあります。クリエイトはできない。仕事も土木はできないが、知恵は大事ですよ。一生懸命やりますよ。

・世代交代だけが進む

堀内…ここ一〇年をみていまして、単純に世代交代が進みます。社会経済のパイがどんどん小さくなっている。パイの外に優れた技術や知識がある人がたくさんいるのに使っていない。外国からみたら日本社会は違うんじゃないか。ひよつとすると成功例にならない。

藤井…日本は高齢化率が高い。高齢者を面倒をみてもらう対象にしてしまうのがいけない。消費税をみんなが負担できるの、両方なんですよ。

堀内…古い「男の美学」が生きている。仕事が終わったら隠居。

藤井…まだ日本の社会にはそれがあります。じじいが出てくるのはなんだという。

尾崎…先生は八〇でご隠居やりたいのですか。

藤井…やりませんよ。裏でやります。野中（広務）さんも八六歳かでしょ、裏の仕事です。小沢（一郎）さんに頼まれたことがありますが、中年まではわたしのことをわかってくれますが若い連中は知らない。知らない対象は説得できない。そういう社会なんです。ごめんこうむります。裏の仕事をやります。

・アジア社会への貢献

堀内…朝日新聞を早期退社して中国中原にある古都の洛陽から日本を見てみました。優れた国でした。日本製のモノを使って日本人のように暮らしたい。わずか一五年くらい前のことです。いま経済的には日本は技術も人材も資金も送ってアジア諸国のモノづくり、近代化に貢献している。歴史的にはそのとおりで、歴史家はそう書く。しかし残念ですが、政治的にはそういう動きになっていない。藤井…「新成長戦略」には書いてあります。日本は科学技術に優れている。それを提供してともに繁栄する。企業人はよくやっています。もうひとつ大事なことは先端技術ばかりでなく「匠」の技術です。料理人、すしや、旋盤工、「匠の技術」はなんでもすぐれている。自由業でやれる人はやっています。あとは大企業のサラリーマン。これがわが国の中核ですからね。これを六五歳まではなんとかしよう

法律を直したわけですが、そういう面で活かせるかどうか。尾崎…いまは領土問題なんか出てきていますが、日本が戦後に中国とか東南アジアの社会で果たしてきた役割は相当ある。

藤井…あります。

・若い政治家の歴史認識

尾崎…若い人は政治家も歴史を勉強していない。

藤井…そのとおり。尖閣の歴史も勉強していない。そこで党として「近現代歴史調査会」をやっている。議員だけでなく取材に来たマスコミの人なんかで満員。講師に新聞社の人にも来てもらった。幹事が「マスコミはなぜ戦前墮落したか」を頼んだら、「なぜ戦争を押さえられなかったか」4でかんべんしてよ。

尾崎…「墮落したか」ではやりづらい。戦争をあおって新聞は部数を伸ばした。

藤井…満州事変で規律を破った「越境將軍」を礼賛したり、松岡（洋右）の連盟脱退でも「孤立」を礼賛した。「よくやった」といつて礼賛。昭和六年にはまだ統制はなかった。その後、仲良くしないと取材できなくなった。そんな内輪の話をしてくれました。

・高齢熟練社員のこと

尾崎…高齢社という会社があつて、遊んでいる人に仕事をつくつて。週に二、三回、日程は自由に働きたい人に働い

てもらう。いま年収が3億円に。
藤井…需要があるんですね。経営者と決めるのではなくて能力のある社員は置くこと。月給をさげてもいいということにはなっている。

堀内…そのことで最後にひとつ。長年やってきた仕事の先で、高齢熟練社員は高齢者が使う優れた製品をつくれないうものでしょうか。若い人の仕事を取るのではなくて、自分たちの暮らしを豊かにする製品をつくる。それぞれの企業が温存している高年技術者が企画してつくれば仕事ができる。そこしかない。六五歳までつないでも仕事をふやさないかぎり。

藤井…いままでの会社の仕事をやってもらう。

堀内…はい。温存しておいて、新しい企画をした人を残して。それなら自分もやる気になる。定年まで窓際で、ほかのところ出してやらせるのは違う。

尾崎…ウイン・ウインの関係をつくる。

・商品も居場所もこれから

堀内…モノについては日本企業が東南アジアへ出ていってつくる百均商品が多すぎる。それまでは日本の熟練技術者がつくった優れた商品がありました。われわれ高齢者はアジア共生のために百均商品でがまんしてきた。そろそろやや高でも安心して使える製品づくりをごく身近なところでそれぞれの企業がやる。
藤井…なるほどね。

尾崎…若い人の集まるまちは竹下通りとかある。老人が好むまちやマーケットがあつていい。阿佐ヶ谷なんかがいい。藤井…デパートには老人コーナーができています。あれは大したこと。

尾崎…それで。

堀内…三年お待ちしました。うかがいたい細かいこと、まだこんなにあります。

藤井…またやりましょう。

・・・

おふたりは「二階堂（進）さん以来だから」といって、共有している時期のことをしばし思い起こしておられたようだった。

財政上のひと仕事は終えたものの、藤井さんにとって、ここまでは道半ばである。これからあとの経済成長をどうつくるかの課題に回答を期待してお会したのだった。熟練高齢社員のありようについてまではお話ができしたが、地域活性化のための自治体と地域で果たす高齢者の役割などについては踏み込めなかった。遠く深い「尋根求底」のためにはもう一度の機会をえて、政治の側からわが国を蓋うデフレーション（萎縮）からの脱却の道筋を説明していただければと思う。

（二〇一二年・一一・一記 堀内正範）